様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１４５９

研究課題名（和文）＜周縁＞からの東アジア国際秩序の探求ー台湾・沖縄の間主観と国際関係史の視座

研究課題名（英文）Exploring the East Asian international order from the periphery: Taiwan-Okinawa intersubjectivity and perspectives on the history of international relations.

研究代表者
森川　裕二（Morikawa, Yuji）

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：９０４４０２２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は東アジアの国際関係を周縁的な地域・国家から「間主観性に基づく国際秩序」の可能性を探求し、大国中心の国益観に代替する国際秩序を検証するための理論から実証までの新しいアプローチ手法を開拓することである。東アジア海域交流拠点としての過去を有す東アジアの周縁としての台湾・沖縄におけるネーションに着目し、国家の下位レベルの交流によって構築される間主観がパワー重視の国際関係とは異なる国際関係の所在を理論、歴史、実証分析を連関させながら検討した。実証的研究においては、①中心本位の秩序と周縁の間主観秩序、③国家の公的記憶と周縁の記憶、のそれぞれを対照比較した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「周縁からの間主観性に基づく共生秩序」の研究では、国家及び地方政府の公式見解を検証するだけではなく、輿論と対話する知識人の影響力も重要な要素となる。周縁の言論人や知識人の語る言葉の真意こそが間主観と主体のマインドを知るために有益な情報源となる。本研究の成果は、台湾を中心とする大学研究人のネットワーク組織「アジア人文社会フォーラム」の「新東亜学の創生」プロジェクトに発展的に継承され、東アジアのオルタナティブな国際秩序を周縁の視点から理論化する態勢を整備した。特に理論面では従来の社会科学の哲学的基礎である存在論を問い直し、『量子マインドと社会科学』（明石書店）から2024年度、上梓する。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to explore the possibility of an international order based on intersubjectivity from the perspective of marginal regions and states in East Asian international relations, and to develop a new approach method from theory to empirics to examine an alternative international order to the great power-centred view of national interests. Focusing on the Nation in Taiwan and Okinawa as the periphery of East Asia, with its past as a centre of exchange in the East Asian sea area, the project examined the location of international relations different from the intersubjective, power-oriented international relations constructed through exchanges at the lower levels of states, by linking theory, history and empirical analysis.
For these studies, particularly with regard to the intersubjectivity of the periphery, existing histories of international relations by state actors and interviews with Taiwanese and Okinawan intellectuals were conducted.

研究分野：政治学

キーワード：東アジア　国際秩序　間主観性　周縁　共生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

冷戦後の国際社会は、グローバルな越境現象が顕著になり国際関係の時空間の急激な変容をもたらすとともに、とくに研究開始当初、英国の EU 離脱や米国第一主義によるナショナルな「壁」の出現などポピュリズムの台頭という新たな社会現象を招来してきた。東アジアにおいても、一方で人々の越境移動が増大しながら、他方では古典的な国家間対立の構図とともに、歴史記憶を巡る対立の構図が持続的に再生産されてきた。国際秩序の変化の胎動に対し、既存の大国のパワーを中心概念に据えた現実主義の国際政治は分析と予測の限界を露呈し始めている。東アジアは戦後 70 年以上を経過してなお個人、国家そしてリージョナルなレベルで歴史の再記憶化を繰り返すプロセスの中で敵対意識が育まれ、国際関係は経済的には統合、政治的に対立という、相反するベクトルが作用しながら国家間の境界はより明瞭になりつつある。こうした国際秩序の変動と表裏一体となって増幅された敵対と対立の構図をいかに克服すべきか。和解＝相互理解への模索は、国際政治学、歴史学の最重要テーマのひとつになっていた。

このため、本研究では、戦前期の日本、戦後の米国、そして今世紀の中国と帝国秩序と台湾・沖縄を関連づけ、周縁としての自己・他者認識を、国家の思想的枠組みと歴史的文脈に即して調査し、「間主観性に基づく共生秩序」を周縁から構築するための課題について考察した。

２．研究の目的

本研究の目的は、東アジアの国際関係を対象に、周縁的な地域・国家から「間主観性に基づく国際秩序」の可能性を探求し、大国中心の国益観に代替する国際秩序を提示することである。その際、海域交流拠点としての過去を有しながら、東アジアの周縁に位置づけられてきた台湾・沖縄におけるネーションに着目し、それらの間主観がパワー重視の国際関係に与え得る影響を国際関係および歴史学の双方から分析する。かつての琉球王朝、東アジア近現代における台湾という地域は、パワーに相対的に劣る周縁に位置付けられてきた。そうした周縁に生きる国家・地域であれば、中心の大国（日本・米国・中国）への従属を避けるため、あえて大国中心の国際秩序と衝突しないように配慮しながらも、当事者すべてが受容できるパワーバランスを同時に間主観性の秩序を模索し構築していたことが考えられる。前近代までの清朝と琉球、日本、対馬、朝鮮の例があるように、西欧近代型とは異なる周縁の国際秩序が存在したと仮定できる。清朝―琉球―日本の例に顕著なように、中心の建前ともいえる力の国際秩序認識はあったものの、それは周縁を一方的に従属・支配するような国際秩序ではなかった。むしろ周縁が自律性を発揮できる独自の秩序が存在した。

こうした問題意識に基づき、具体的には次の３つの過程を検証して周縁と国際秩序の関係を検証した。（１）歴史的検証：日本、米国、中国それぞれ歴代の＜帝国＞の影響下で自律を目指してきた小国の国際政治におけるパワーの視点の検証、（２）際関係論による分析：帝国と小国の間主観すなわち国家アイデンティの変容についての分析、（３）歴史認識分析：現代東アジアの人間と国家の安全保障と国益との相克の分析。これにより、大国のパワー・国益を中心に据えた従来の国際関係論の視点を克服し、国際秩序の変動期における共生のための新たな理論的枠組みを検討することにした。

３．研究の方法

本研究の基礎的課題は、ナショナルな空間に単純化された歴史認識と一体化しつつある人々の記憶空間が再創造されるプロセス（再記憶化）に映し出される、社会の中での「包摂と排除」の力学を詳述することである。還元すれば、国家主体と非国家主体を相互独立の関係として位置づけるのでなく、また包摂と排除、和解と対立のように二項対立関係で論じる従来の研究枠組みを超越した研究枠組みを開拓することである。対外関係においは支配側と被支配側で記憶のヘゲモニーを巡って対立し、いずれか一方を屈服させ＜歴史＞と記憶を支配する。対内関係においては、グローバル化する世界の揺らぎと不安の中で、個人や集団など多様な主体が記憶の「承認を求める闘争」を激化させる。その結果、個人の記憶は脱個人化され、国家的記憶として包摂されていくのは日中韓に共通する現象であろう。歴史的和解の実現には、歴史記憶の二項関係を克服し、大きな国家の物語に回収されることのない個人、社会、国家、リージョンそれぞれの間主観によって構成される多元的な社会空間からのアプローチが必須である。

こうした発想の下、本研究では従来の国際秩序観では国際関係のアクターとして等閑視されてきた台湾・沖縄に照準をあてて、東アジア国際関係の新しい視点を提示することに主眼を置きながら既存の国際関係理論では対象の外に置かれてきた主観と意識（マインド）を研究対象に据えた。この発想が、相互の脅威認識を克服して異質な他者と共存するための「間主観性に基づく共生秩序」の構築のための理論と方法の土台となっている。

「周縁からの間主観性に基づく共生秩序」を検証するため、公的な立場の者による公式見解（外交文書を含む公文書、公人の私文書）を検証するだけでは十分ではない。非政府主体も国際秩序観を語り、輿論と対話する言論人・知識人の影響力も重要である。そこで彼らとのフォーラム形式及び個別聞取り調査を実施した。周縁の言論人や知識人が公的な空間向けに語る言葉の真意

は別にもあり、その隠された真意こそが間主観を知るために有益な情報源となるからである。そこで公的記録の検証と聞き取り調査を軸として調査・研究を実施した。特に、従来の歴史和解のための研究を踏まえ、（１）ナショナルアイデンティティ、（２）国際秩序認識、（３）歴史認識の方法論を主要項目とする知識人の意識調査を実施した。

各調査では台湾・沖縄現地の研究協力者の所属大学と連携してワークショップ形式（年３回）を採用し、そこで得られた主観的認識を個別調査で補足した。沖縄では間主観性の秩序の存在と、力の秩序の歴史的な連続性について考察するため、琉球王朝以来の東アジア国際関係史の中での沖縄の政治的な位置、及び第二次大戦前後を焦点に記憶と歴史事実の連続性が現代の沖縄における間主観性としての平和意識として情勢されてきたことを、戦後歴史の語り部、および研究協力者のインタビューから確認した。

４．研究成果

本研究の代表者、分担者はいずれも次の二つの科研費プロジェクトに分担者として参加してきた。

（１）新学術領域研究「和解学の創成－正義ある和解を求めて」(2017 – 2020 年度、代表・浅野豊美 早稲田大学教授)、（２） 基盤研究（A)「東アジア「知のプラットフォーム」の現状に関する研究」(2017-2021、研究代表・平野健一郎 早稲田大学名誉教授)

いずれも、東アジアにおける研究者の連携をテーマとする研究プロジェクトである。これらの成果と、本研究成果を連携させ、台湾を中心とする研究人のよるネットワーク研究体制「アジア人文社会フォーラム」を組織化するとともに、研究成果については書籍として公刊したほか、周縁からの秩序、和解、知のプラットフォームをテーマとする国際シンポジウム「新東亜学の創生」（2023 年１月、12 月）を開催し情報発信した。また、研究協力者の所属大学である台湾・中国文化大学アジア人文社会学院と連携し、双方の次世代研究者（若手教員・博士後期課程院生）との間で現代アジア研究の主要文献の解題と討論をオンライン形式で定期開催する東アジア研究対話メカニズムを発足させ、「台湾から知る日本・アジア」、「日本から知る台湾・アジア」の相互対話による「間主観性の秩序」形成を思考実験した。

理論研究の成果としては、従来の社会科学の存在論的哲学を再考し量子意識論のアナロジーを援用した新しい国際関係理論の課題を、政治学、社会学それぞれを専門とする研究分担者との共同研究により明らかにした(『量子マインドと社会科学』明石書店、2024 年度末出版予定)。本研究で対象なる大国間の力の秩序と、周縁の間主観性の秩序は独立した関係ではなく一体的かつ相補的な関係である。前者の理論は古典的なカント・ニュートン以来の科学哲学に基礎を置き、後者は構造と個を一元論的に理解する量子論的な意識の世界である。この双方を止揚するための国際関係理論を含む新しい社会科学を創造する存在論上の課題を体系的に整理した点で学術的独創性を探求した成果である。

量子論は 1920 年代に現代物理学として確立して以来、「量子もつれ」、「重ね合わせ」といった相互作用、関係性を規定する社会科学における重要な意味を持つ認識枠組みや、「不確定性原理」にみる社会現象の偶有性など、電子が粒子と波の二つの特性を持つことに起因する古典物理学では説明不可能な「奇妙な世界」を理解するための理論を提供してきた。本研究のキーワードである「間主観性」と「秩序」の特質は、前者は「個」の関係性、後者は国際関係の「構造」である両者を同時に一体的に扱う社会科学、国際関係理論は少なくとも、分析枠組みの提示を目的とする理論は存在しない。既存の社会科学、とくに国際秩序や国際関係を扱う国際理論はニュートン力学を中心とする主体と客体、個と構造の二元論的な世界を前提としている。個と構造、主体と客体といったニュートン的宇宙の内部構造の概念を根底から崩した量子論が、東アジアにおける間主観性の国際秩序と、大国中心の国際秩序の相補的な機序を理解する有力な理論枠組みを提示する潜在的な可能性を秘めている。

社会科学の変革の契機となるとの認識の下で、因果律の説明を主たる目的とする合理的なシステム理論ではなく、「不可視な世界」に接近するための国際秩序論の展開課題を明らかにした。具体的に以下の３点について考察した。

（１）古典物理学を基礎にした政治学、社会学の系譜と存在論・認識論の再考。ニュートン力学に基礎を置く力と利益の主流派国際政治理論の限界と、現象学的社会学の学術的系譜の量子論の視角からの再考。

（２）量子論による社会学の統合可能性についての以下の考察。①パーソンズ（ミクロ・マクロの接合）からルーマン（ミクロ・マクロの脱構築）に至る社会システム理論、②ジンメル（心的相互作用論）やミード（象徴的相互作用論）からゴフマンやガーゲン（構築主義的相互行為論）に至る相互作用論、③シュッツからルーマンに至る現象学的社会学、これらの系譜を量子論の哲学に関連づけ統合していく可能性を考察。これらの考察をもとに、量子論的な社会科学の展開について国際秩序論を中心に検討。とくに、個に注目する方法論的個体主義（individualism）と、社会システム全体を射程とする方法論的集団主義（holism）が対立する構造・エージェント問題の解消を量子意識論の視座から検討した。

（３）東アジア（大国と台湾・沖縄）と国際関係を射程に入れた量子論的社会理論の実証的研究への適用可能性の考察。

これらの考察により、国家間の関係を単純な力の関係と主体行動の合理性に基づく「客観分析の実証主義」と、複雑な現象を分析ではなく「読み解く解釈主義」の＜あいだ＞を、量子論とく

に量子意識の関係規定性、相互作用性、不確定性などの原理によってつなぐ試みであり、今後の国際関係論、社会学の理論研究に新たな視座を提供する試みでもある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 劉　傑	４．巻 58
２．論文標題 中国の「一帯一路」政策とアジアの「知の共同体」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学術の動向	６．最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 首藤　明和	４．巻 8
２．論文標題 プラネタリー・ソサイエティ(惑星社会)の課題と展望 ： 時間と自己言及性から考える	５．発行年 2021年
３．雑誌名 多文化社会学研究	６．最初と最後の頁 10-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森川　裕二	４．巻 11
２．論文標題 東アジアの連携に向けた研究回路の構築　周縁的アプローチとしての間主観的秩序	５．発行年 2021年
３．雑誌名 21世紀東アジア社会学特集	６．最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伍　嘉誠	４．巻 46
２．論文標題 「香港における抗議活動と新型コロナウイルスへの一考察―「マスク」と「集会」をめぐる議論を中心に―」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日中社会学研究	６．最初と最後の頁 29-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小松寛	4．巻 54
2．論文標題 「沖縄問題」の本質	5．発行年 2020年
3．雑誌名 平和研究	6．最初と最後の頁 ｉ-xvi
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伍嘉誠	4．巻 25
2．論文標題 現代アジアにおける宗教の役割と多様性―環境政策、移住民支援、社会運動、ウェルビーイング―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 宗教と社会	6．最初と最後の頁 223－232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伍嘉誠	4．巻 5
2．論文標題 香港における抗議活動の背景と発展についての一考察	5．発行年 2020年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 131－140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 森川　裕二
2．発表標題 周縁からの間主観性の視点
3．学会等名 北東アジア学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 首藤　明和
２．発表標題 Manner of Multicultural Symbiosis based on "Islamic- Confucianism": A Case Study of Yunnan Muslim Huizu
３．学会等名 Seminar on Contemporary "Local World" in Mainland Southeast Asia（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 伍　嘉誠
２．発表標題 “When Anti-Mainland Nationalism Meets Christianity in Hong Kong”
３．学会等名 East Asian Society for the Scientific Study of Religion（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 伍　嘉誠
２．発表標題 対中意識の間主観性－社会運動にみる香港と台湾の連帯
３．学会等名 北東アジア学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伍　嘉誠
２．発表標題 Religion and Biopolitics in Hong Kong: ReligiousResponses to Government's Zero-Covid Measures",
３．学会等名 the 4 th Annual Meeting of East Asian Society for the Scientific Study of Religion
４．発表年 2022年

１．発表者名 伍　嘉誠
２．発表標題 Hong Kong’s Resilience in the Face of COVID-19: The Role of Civil Society amid Adversity”
３．学会等名 The International Convention of Asia Scholars.（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小松　寛
２．発表標題 沖縄から戦後日本国家を見る――沖縄から古関・豊下『沖縄 憲法なき戦後』を読む
３．学会等名 日本平和学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 タンシンマンコン　パッタジット
２．発表標題 小国のタイからみた大国の中国 ―3つのイメージからなる中国認識―
３．学会等名 北東アジア学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 野口　真広
２．発表標題 ＜周縁＞からの東アジアへの眼差し－柳宗悦を中心に
３．学会等名 北東アジア学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小松寛
２．発表標題 日本復帰後の沖縄県による自治体外交と中台問題
３．学会等名 日本国際政治学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 タンシンマンコンパッタジット
２．発表標題 中国外交と周辺諸国の反応：タイとベトナムを例として
３．学会等名 早稲田大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 タンシンマンコンパッタジット
２．発表標題 米中和解に対するタイの対応
３．学会等名 歴史と和解ワークショップ
４．発表年 2021年

１．発表者名 森川裕二
２．発表標題 政治学と歴史学の対話―中国学派への視線と課題を中心に
３．学会等名 歴史と和解ワークショップ
４．発表年 2021年

１．発表者名 首藤明和
２．発表標題 プラネタリー・ソサイエティ（惑星社会）の課題と展望
３．学会等名 長崎大学大学院記念講演（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計9件

１．著者名 劉　傑、野口　真広、タンシンマンコン　パッタジット	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 381
３．書名 和解のための新たな歴史学――方法と構想（和解学叢書5＝歴史家ネットワーク）	

１．著者名 劉　傑、中村　元哉	４．発行年 2022年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 244
３．書名 超大国・中国のゆくえ1　文明観と歴史認識	

１．著者名 首藤明和	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 280
３．書名 「中国の国境地域を生きるムスリムから――意味世界のなかにあって観察し記述する」	

１．著者名 首藤　明和	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 240
３．書名 中国のムスリムからみる中国	

１．著者名 森川　裕二	４．発行年 2021年
２．出版社 松本工房	５．総ページ数 191
３．書名 多文化社会学解体新書191	

１．著者名 小松　寛	４．発行年 2020年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 280
３．書名 基地の消長 ;日本本土の米軍基地「撤退」政策	

１．著者名 佐藤幸男、森川裕二、中山賢司	４．発行年 2019年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 352
３．書名 〈周縁〉からの平和学	

１．著者名 首藤　明和	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 240
３．書名 中国のムスリムからみる中国	

１．著者名 櫻井　義秀　伍嘉誠	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 344
３．書名 中国・台湾・香港の現代宗教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	タンシンマンコン　パッタジット (Tangsinmunkong Pattajit) (10844136)	早稲田大学・社会科学総合学術院・講師（任期付） (32689)	
研究分担者	野口　真広 (Noguchi Masahiro) (30386560)	早稲田大学・地域・地域間研究機構・その他（招聘研究員） (32689)	
研究分担者	小松　寛 (Komatsu Hiroshi) (50546314)	成蹊大学・アジア太平洋研究センター・研究員 (32629)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	首藤　明和 (Shuto Toshikazu) (60346294)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	劉　傑 (Ryu Ketsu) (80288018)	早稲田大学・社会科学総合学術院・教授 (32689)	
研究分担者	伍　嘉誠 (Go Kasei) (90808487)	北海道大学・文学研究院・准教授 (10101)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	徐　興慶 (Jo Kokei)	東呉大学・外国語学院・特任教授	
研究協力者	普久原　均 (Fukuhara Hitoshi)	琉球新報・本社・社長	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
東アジア人文社会フォーラム　東亜学の創生	2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関